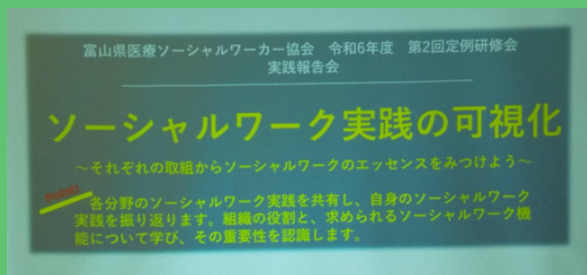


シン・研修報告書 富山県医療ソーシャルワーカー協会

令和6年度第2回定例研修会

令和6年12月14日(土)



ソーシャルワークの実践の可視化 - 実践報告会 -

藤永彩夏氏（公立南砺中央病院）

笠木悠史氏（横田記念病院）

平井誠氏（高志生活訓練センター）

戸田友里恵氏（アルペンリハビリテーション病院）

中野留美氏（富山市まちなか総合ケアセンター）

研修会の感想

谷野呉山病院 中島健一

精神科病院のソーシャルワーカーとして勤務してきましたので、総合病院等に勤めるソーシャルワーカーがどのようなきっかけで当事者に関わり始め、**何を大事にしながら**、どのような支援を展開していくのか、ずっと気になっていました。

5年ほど前から私が担当する方々が年齢を重ね、精神科医療以外の医療や福祉サービスを必要とすることは増えてきた印象があり、それが本研修への参加を後押ししたと思っています。

5つの実践報告の中で高齢者の退院支援に関わる事例が、3つありました。ある方は「本人の希望に沿いつつも家族寄りの支援だったかもしれない。」と振り返っていらっしゃいました。私も高齢者の退院支援に関わる上で、同じように「自分は誰の希望で支援をしているのだろうか。」と言うことを度々感じることもあり、**今一度自身の支援内容を点検しながら進めていく必要があると思いました。**

また、介護支援専門員との連携事例は、本人の意向に沿い自宅退院を調整していく中で、施設入所ありきの介護支援専門員との連携に苦慮されたという内容でした。私も事例の介護支援専門員と同じように入院前の通院時から当事者に関わり、退院後もまた関わり続けることがありますので、支援者側のほうで「在宅生活はもう難しいのではないか。」とってしまうことがあります。そのようなこちら側の見立てがありつつも、「どこまで出来るか一度家に帰ってやってみたい。」と本人が話す言葉を、入院時のソーシャルワーカーが汲み取ってくれたんだと気づけるセンスがあるかと思うと、非常に不安になりました。その点を実践報告者の方は「**相互理解**」を図っていくことが大切だったと振り返っていらっしゃったと思います。

関わり時間が限られた中で、**当時者の思いをどう実現できるかに苦慮されている実践報告**を受けて、支援している場所は異なれど同じ視点なんだなと思うことができて安心しました。この研修での気づき念頭に置きながら明日からの実践に活かしていきたいと思いました。

広報事業部の
一言つぶやき

所属機関の機能が異なってもソーシャルワーカーとして大切にしていること、実践で試行錯誤しながら日々奮闘していることは共通していますね。決して、我々は誰のために何のために支援を実践しているかを忘れてはいけない、そんな気持ちになる皆さんの素敵な実践報告だった研修会の感想からも分かりますね。みんなで助け合いながら専門職としてのアイデンティを育んでいきたいと思います。

研修会の様子

